



Title	漱石における心霊主義の受容：「哲学雑誌」を踏まえて
Author(s)	莊, 千慧
Citation	阪大近代文学研究. 2012, 10, p. 16-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92678
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

漱石における心霊主義の受容

——「哲学雑誌」を踏まえて——

莊 千慧

はじめに

周知のように、漱石は超常現象に興味を持っていた。超常現象に対して科学的な検証を行う心霊研究は、漱石が小説を書き始めた明治三〇年代から社会的なブームとなった。漱石の初期小説でも、心霊研究に関する話題がしばしば作中に取り入れられている。たとえば、『吾輩は猫である』では、距離の離れている人たちが相手の気持ちを察知できるという「人間の感応」について登場人物が話題にする場面が見られ、上篇の第六回には「霊の交換」が登場人物の話題にのぼっている。ここでいう「霊の交換」は、「相思の情の切な時」に起こる現象であり、後に「夢の様だが、夢にしても現実より糙かな夢」と『琴のそら音』にも書かれている、距離を隔てた男女の愛による精神的な感応と共通する。『行人』の一郎も「テレパシー」を「真面目に研究」していた。そのほか、『吾輩は猫である』には、主人公苦沙弥が「催眠術を応用し

て手癖のわるいんだの、色々な病氣だのを直す事が出来る」という本の内容について医師に尋ね、医者が「えゝ、そういう療法もあります」と答える場面がある。〔催眠術〕も心霊研究の研究対象の一つである。また、『吾輩』が「猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑ふものがあるかも知れんが、此位な事は猫にとつて何でもない。吾輩は是で読心術を心得て居る」という箇所も見られる。川村邦光は、『欧米のスピリチュアリズム』には、漱石が英国留学以前から関心をいだいていたが、一九一〇年を過ぎると、心霊学・神秘主義よりも、W・ジェームズの心理学のほうへと関心を移していたようであると指摘する¹⁾。

しかし、後に詳述するが、漱石の超常現象に対する関心は、彼の心理学・哲学への関心と関連している。『吾輩は猫である』の「ゼームス杯に云はせると副意識下の幽冥界と僕が存在して居る現実界が一種の因果法によつて互に感応したんだらう」という一文から窺えるように、漱石の思想に影響を与

えたジェームズの心理学にも、〈靈の感応〉などに関する研究が含まれている⁽²⁾。漱石は心靈研究に関するジェームズの言及を作中に引用する。このことについても後に詳述するが、『思ひ出す事など』での〈幽靈〉や〈靈〉の書かれ方からも、漱石における心靈学と心理学との関連性が窺える。漱石が心靈学⁽³⁾に興味を持っている時期を遡ると、東京帝国大学の「哲学雑誌」との関わりは見逃せない。「哲学雑誌」では、心靈研究がまだ流行していない明治二〇年代の前半において、すでに心靈学関連の記事が多数見られる。帝大在学中の漱石と「哲学雑誌」との緊密な関係について、彼が「哲学雑誌」の編纂委員を担当しており、論文「ウォルト・ホイットマン Walt Whitman の詩について」・「英国詩人の天地山川に対する観念」を発表したことがあげられる。そのほか、翻訳「催眠術」・「詩伯『デニソン』」も漱石の筆によるものと推測されている⁽⁴⁾。

大久保純一郎氏は、漱石が「哲学雑誌」に発表したホイットマン論（「哲学雑誌」第七冊第六八号。この第七冊は「哲学会雑誌」から「哲学雑誌」に改名した後の第一号）を中心に、同誌の性格からアプローチし、漱石の英文学及び西洋の思想に対する素養は、「哲学雑誌」から影響を受けたと貴重な報告をしている⁽⁵⁾。また、上田正行氏が、「哲学雑誌」の「雑録」「雑報」欄に注目し、編集委員らの関心の的について考察したことも示唆に富んでいる⁽⁶⁾。ただし、いずれの

論考でも、漱石の思想面における受容は論じられているが、「哲学雑誌」に掲載された文章の同時代的な特殊性から、「哲学雑誌」の編纂に携わった時期に接触した文章が漱石の文学作品に与えた影響に関しては、詳しい検討がなされていない。本稿では、まず「哲学雑誌」に心靈主義関連の文章が多く紹介されていることに注目したい。明治前期の心靈学の受容における「哲学雑誌」の位置づけを確認する。また、明治二〇年代の前期に本誌の編纂委員を担当した漱石は、明治三〇年代の後半から小説を書きはじめる。そこで漱石の小説に見られる超常現象と心理作用との関係を、「哲学雑誌」での心靈学関連の文章の特徴と比較する。それによって、漱石が「哲学雑誌」から受けた影響を考察する。

一、「哲学雑誌」と漱石

「哲学雑誌」の前身は、「哲学会雑誌」⁽⁷⁾である（「哲学会雑誌」は、第七卷⁽⁸⁾第六十四号より、「哲学雑誌」と改名した）。「哲学会」⁽⁹⁾は井上円了、井上哲次郎、有賀長雄、三宅雄二郎、棚橋一郎、加藤弘之、西周、中村正直、西村茂樹、外山正一らが、哲学を攻究する会を作るために創立した。しかし、実際に、雑誌に収録された文章は哲学分野のもののみではない。同誌の初期の編集方針は、「心理、倫理、論理等ノ諸学科ノ外ハ邦人ノ知ラザル所ナリシガ、尋イデ純正哲学及ビ哲学史ノ研究モ、亦其途ニ就クニ及ンデ」⁽¹⁰⁾と、「哲

学雑誌」は、アカデミズムの立場から、多分野の学問を日本国内に紹介することを目指している。その多様性は、哲学・心理学関連の記事のほか、文学関連の論文も掲載されていることに窺える。たとえば、第四冊では、「我邦現時の小説の缺點」⁽¹⁾という文章が掲載されており、第七巻の「批評紹介」欄でも、漱石作の英文学の論文「ウォルト・ホイットマン Walt Whitman の詩について」とオーガスタス・ウードの論文「詩伯「テニソン」(全文の和訳は漱石による)」の翻訳が掲載されている。また、雑誌の「記事」欄に医学士呉秀三などの入会可決の記事が見られることから、哲学会の会員も文科大学哲学科の教員や学生には限らず、他分野の人物も参加している⁽²⁾。以上からわかるように、「哲学会」が発行する「哲学(会)雑誌」は、純正哲学のみではなく、心理学・倫理学・文学などの学問も紹介される総合雑誌として見てよい。

漱石が「哲学雑誌」の編纂委員になった時期に関して、「哲学会雑誌」第五冊第五十四号(明治二四(一八九一)年七月三日)「記事」欄に、「今般新に雑誌編纂委員を左の如く定む(中略) 小屋保治 藤代禎輔 芳賀矢一 松本亦太郎 夏目金之助」とあるように、漱石は明治二十四年にはすでに編纂委員になっていることがわかる⁽³⁾。また、同じく「記事」欄から、漱石が編纂委員を担当した時期は、明治二六(一八九三)年十一月までと見られる⁽⁴⁾。漱石が「哲学雑誌」

誌」の編纂に従事し、雑誌の編集に携わった期間は、三年間の大学在学期間のうち二年あまりを占めている。

「哲学雑誌」では、文章を「論説」・「批評」・「雑録」・「雑報」欄に分類する。「論説」・「批評」欄では心理学・哲学をはじめとする多分野の論文や評論が掲載されており、前述した漱石の英文学の論文も「夏目金之助」の署名で「論説」欄に発表された。一方、「雑録」欄では編纂委員が無署名で、外国の定期刊行物の抄訳を紹介する。「雑録」欄に収録される文章は、編纂委員が匿名で発表する形式であるため、実際の執筆者は考証し難いが、編纂委員の中には漱石と同時期に英文科に所属した学生は、現存の資料を見る限りいない⁽⁵⁾。また、アーネスト・ハート(Ernest Hart, M.D.)の「催眠術」を訳す際、漱石が難訳の「豊頬細腰の人も亦行く」という一文を訳したと、藤代禎輔は述べており、漱石が「雑録」欄の翻訳に携わっていると考えられる。

明治二〇年代の前半に心理学・社会学・美学などの知識を紹介する「哲学雑誌」が漱石の思想面に与えた影響はどの分野に見られるのであろうか。上田正行氏は、漱石におけるW・ジェームズについての知識を「恐らく『哲学雑誌』、外国雑誌の情報や友人達から得た知識・情報でジェームズの心理学に関心を寄せていたものと思われる」と推論する⁽⁶⁾。また、「哲学雑誌」を通して接触した可能性のある思想家としてもう一人、H・スペンサーがあげられる。現存の漱石ノ

ートにはスペンサーの社会有機体説・進化論思想に関するメモが多く見られ、漱石の社会学・世界観において、スペンサーの存在は見逃せない。漱石におけるスペンサーの受容を論じるにあたっては、「哲学雑誌」の「論説」欄にしばしばスペンサーの学説が紹介されていることを視野に入れるべきであり⁽¹⁷⁾、大学在学中の漱石が外国の学説を撰取する際に、「哲学雑誌」は重要な存在の一つであったと考えられる。

しかし、ここではまず明治二〇年代に刊行された総合雑誌の中で、漱石が読んでいた可能性の高い「国民之友」・「日本人」を見てみたい。漱石は明治二四年八月三日の書簡の中で、「同人（鷗外）の作は僅かに二短篇を見たる迄にて全体を窺ふ事かたく候」と正岡子規に述べている。鷗外が明治二四年以前に発表した作品は『舞姫』（「国民之友」）・『うたかたの記』（「しがらみ草紙」）・『文つかひ』（「新著百種」）であり、これらの作品が単行本として刊行されたのは明治二五年のこととなる。漱石が鷗外の『舞姫』（明治二三年一月）を「国民之友」で読んだ可能性は高い。また、漱石の正岡子規宛ての書簡（明治二九年一月一日）では、「日本人は当地にて購読の道を開き候へば御送に及ばず候」と、漱石は明治二九年頃に「日本人」を正岡子規に送付してもらっていたことがわかる。さらに、「明けやすき七日の夜を朝寝かな」という漱石の俳句も明治二九年に「日本人」に掲載された（第三次「日本人」第二六号、明治二九年九月五日）。「日本人」の

第一号に、「哲学会」の初期メンバーである井上円了や棚橋一郎の名前が見られるが、この雑誌は政治評論に力を注いだものであり、明治二〇年代に刊行された「日本人」の中で、心霊研究に関連する記事は、第二次「日本人」の第六〇号（明治二五年一〇月一日）の、渋江保編『魔術と催眠術』の書評のみである。（漱石が「日本人」を通して、スペンサーの学説に接触した可能性はあるが、別稿で詳しく考察したい）。ここで示した二誌は共に総合雑誌であるが、明治二〇年代の初期に心霊研究に関する言及は少ない。たとえば、明治二〇年代の「国民之友」に見られる心霊学と関連すると見られる記事は、明治二二年第四二巻に掲載された、「サヴェージ原著「靈魂不滅論」の書評をはじめ、「心霊電信」（第一四二巻「誌録」、明治二五年）と、「近藤嘉三著「魔術と催眠術」（第一六七巻「批評」、明治二五年）と、「斎藤小二郎訳「読心術」（第一七六巻「批評」、明治二五年）と、「井上円了著「哲学館講義録 妖怪学講義」（第二〇八巻「批評」、明治二六年）と、「近藤嘉三著「幻術の理法」（第二四五巻「批評」、明治二八年）と、「教育上催眠術の功用」（第三二一・三二二巻「雑録」、明治二九年）など、書評が中心である。心霊主義に関して、漱石がこの二誌から影響を受けているとは言いがたい。

ところで、「哲学雑誌」において編纂委員ともっとも関わりのあるのは「雑録」欄である。以下、「雑録」欄に心霊学

関連の文章が多く収録されることに着目し、同時代における「哲学雑誌」が心霊学関連の記事を多く紹介することの意義を検討する。

二、「哲学雑誌」における心霊学関連記事

明治二〇年二月発行の「哲学会雑誌」第一号では、円丁が「不思議庵主人」というペンネームで発表した「こっくり様の話」があり、無署名の「読心術実験」が「批評紹介」欄に掲載される。第二冊では「妖怪、夢及催眠術」の紹介があり、第三冊に「伝想術の話——政党の心理的觀察」が収録されている（以上同「批評紹介」欄）。明治二〇年代前期の「哲学雑誌」に収録される文章ではすでに哲学・心理学の観点で超常現象が解析されている。「哲学雑誌」に心霊学関連の記事が多く紹介されることに關して、「哲学会」の会員である文科大学の教員の影響は見逃せない。漱石より一年遅れて哲学会に入会した松本亦太郎が、後に自身の著書で、「哲学雑誌」を「多方面に涉り西洋に於ける心理学の研究を稀薄の程度に於てではあるが、我国に伝へたものは「哲学雑誌」掲載の論文、抄録等である。夫等の中には靈知学的（読心術、妖怪学、降神術等も包含）、変態心理学的、教育応用的、記憶術及催眠術的、犯罪心理学的、動物心理学的のものがあり、又遺伝に関するものがある」（¹⁸）と言っているように、「哲学雑誌」は明治前期における心理学の紹介の先導的な位置にあ

る。初期の「哲学雑誌」に紹介される心霊学関連の文章は、「論説」欄を中心に掲載されている。この欄に発表された文章は、ほぼ毎月一回の頻度で開催された「哲学会」の例会での教員や専門の学者による専門的な心理学・哲学の学説に関する講演を文章にしたものである。この欄に心霊学関連の話題が見られることから、¹⁹「哲学会」に所属する学者らが、心霊研究を心理学の一つとして受け入れていたと考えられる。実際、哲学科教授の外山正一は「心理学」の講義で、「メスマリスム」・「スピリチュアリズム」を紹介する²⁰。「哲学雑誌」の「論説」欄で活躍していた元良勇次郎²¹も、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学の留學中に、「催眠」など心霊学関連の知識を学んでいた²²。「哲学会」の中心人物である教員の一部が、留學中に心霊現象を心理学の研究対象として扱う考え方を身につけ、帰国後に心霊学に関する知識を心理学の授業に採り入れたのである。「哲学雑誌」が発刊された当初から、「論説」欄の執筆者である教員・専門の学者により、心霊学は心理学の新しい研究分野の一つとして心理学の枠組みに入れられている。

「哲学会」に所属する学者らの、心霊研究に対する考え方は以上のようにであり、彼らの主張は、「哲学会」の例会で講演された。「哲学会」に所属する教員の講演が雑誌の編集作業に如何なる影響を与えたかということは不明だが、編纂委員らは心理学の一環として紹介される心霊研究を彼らの講演

により認識したと考えられる。本節では、「哲学雑誌」における心理学の紹介の特徴から、漱石が編纂に従事した時期において、「雑録」欄に心霊学関連の文章が多く紹介されていることに注目し、それらの文章の共通点を検討する。漱石が東京帝国大学に入學した明治二十三年から雑誌が改版された明治二十五年までに、「哲学雑誌」に掲載された文章の計六十六篇の中で、心霊学関連の文章は二十九編を占めている。(詳しい篇目は【附録2】を参照。附録2にある「雑録」欄の目録からもわかるように、心霊学関連の文章が多く紹介されており、それらの文章での超常現象に対する考え方には共通点が見られる。一例として「雑録」欄所収の、「幻想の一例」(第四冊第四四号)を引用する。

五官中の一官を刺戟して他官の作用を増加し若くは之を創起せしむることは世の心理学者の是認する処にして明白なる事実なり(中略)同書には氏の実験を述べて曰く一日氏は机案に倚りて坐したりしに階下に於て戸を閉つるの声高らかに聞えたり此時氏は直ちに其室の一隅に一種の香氣あることを感せり後二十四分時も立ちたらんと思ふ頃窓下に馬車の櫪々として走る響を聴きしに此度も亦以前と同様の香氣を感じ馬車の響聞えずなりし時は香氣も亦消え失せたりと云ふ氏の著書には聴覚的の幻想を起す大脳の自動作用を論せる一章あり又睡眠中に感せる聴覚の幻想を論せる章もありて心理学者に取りては此

上もなき興味あることなるべし

この文章では、不可思議な現象が心理学の観点で分析されている。このことは、「哲学雑誌」に収録される心霊学関連の文章の共通点である。それらの文章では、心理学的な解釈が付け加えられ、超常現象を「心理作用」による錯覚(「幻像」・「幻想」と扱うことが前提とされている。同誌に紹介される心霊学は、「迷信」を信じないことが「常識」だと思われる明治前期において、「新しい」超常現象の捉え方である。人の心理を研究する時に、超常現象が探求の方法の一つとして利用されることになる。超常現象の起こる原理を分析する心霊研究は、心理学の一部として明治前期の文科大学に紹介されており、「哲学雑誌」の「雑録」欄に心霊学関連の文章が多く紹介されることに、「哲学雑誌」の編集における、心霊学に対する持続的な関心の高さが窺える。「哲学雑誌」の「雑録」欄の編集作業を通して、編纂委員は当時の日本国内ではまだ流行していない西洋の心霊研究の文章に接触することができた。また、「論説」欄では学者らによる心霊研究の紹介が見られる。「哲学学会会則」では、「雑誌委員ヲ置キ雑誌編輯並ニ発行ノ事務ヲ一切委託スルコト」(2)と明記している。「雑録」欄に心霊研究に関連する文章が多く掲載されることから、編纂委員らも「哲学会」の学者たちと同じように心霊研究に関心を示していたと窺える。

「哲学雑誌」で心霊学が積極的に紹介されるのは、新しい

心理学の研究分野として考えられているためである。しかし、留学中に「催眠」に関する知識を勉強した哲学会会員の元良勇次郎も、心霊研究は果たして「科学」であろうかと「懷疑」的な態度を示している⁽³⁵⁾。元良勇次郎をはじめとする心理学者が留学した時期、西洋の心理学者は心霊研究に接近し、科学で解釈できない心理現象を解釈することを試みていた。「哲学雑誌」は、文明開化期に「迷信」だと思われていた超常現象の存在を肯定するため、心霊学関連の知識を掲載したのではない。本誌は新たな心理学の研究手法の一つとして日本国内に紹介した。この態度は、西洋の心理学者が心霊研究に接近する理由と類似する。漱石が心霊主義に寄せた関心の焦点と心理学との関連性は四節で詳述するが、このように、「哲学雑誌」が心霊研究と関連する記事を紹介する態度と漱石の心霊主義に対する考え方が近いことは見逃せない。

三、明治期における心霊学の流行

明治初期には、超常現象を否定することが「常識」になっている。この時期の「常識」は、幽霊を見たことを神経が弱っている症状の一つとして考え、超常現象の存在を否定する。たとえば、超常現象の存在を否定する時流の中で、「こっくりさん」の起源などが世間の話題になったが、「(霊)の存在を否定しない、超常現象に科学的な分析を行う心霊研究は当時「野師の所行」⁽³⁶⁾と見られ、一般的に受け入れられてい

ない。明治二〇年代の初期までは、超常現象を実在しないものだと考えるのが常識的である⁽³⁷⁾。

「哲学雑誌」に紹介される心霊学関連の文章を同時代の中で位置付けるために、まず、出版界の動向を通して、明治期の心霊学の受け入れ状況を確認したい。明治期に刊行された雑誌⁽³⁸⁾及び『明治期刊行図書目録』⁽³⁹⁾を参照した結果、明治三〇年以前の心霊学に関連する書籍は、西洋の作品を訳したもののがほとんど(邦人の編纂の著書は、『人身電気の図画』・『西洋奇術狐狗狸怪談』・『魔術』(上・下)・『幻術の理法・附神と幽霊』のみである)であり、内容も宗教(特に仏教)絡みのものが中心である。出版状況から窺えるように、「哲学雑誌」が心霊学関連の記事を掲載する明治二〇年代において、超常現象に科学的な実験や分析を加える心霊研究は日本国内で盛んではなかった。

なお、雑誌や書籍のみではなく、新聞から見ても、たとえば、明治二〇(一八八七)年七月の『読売新聞』では、「社説」欄にて「催眠術を論ず 社会に害あるやいなや、が緊急課題」という文章が見られるが、催眠術を「此事は既に我国一二の新聞紙にも記載し且先に催眠術を試みざる者のある事は其頃我紙上にも記載しうる處になる」と、同時代のヨーロッパにおける心霊研究の流行に着目し、今後の日本社会に与える影響に懸念を示していた。この記事から、心霊研究がこの頃には日本社会でまだ流行していないこと、また、心霊研

究がこれから日本社会に悪影響を与えるものと考えられていることが窺える。『朝日新聞』上に、心霊研究に関連する記事がはじめて見られるのは、明治二四（一八九一）年の馬島東白氏による催眠術の演説会の紹介である。いずれの新聞からとも、明治二〇年代前期に日本国内では、心霊研究は社会的なブームとはなっていないと考えられる。

また、「哲学雑誌」以外の、明治前期に刊行される学術雑誌を通して、学術界での心霊研究の受け入れ状況がわかる。明治一八（一八八五）年三月に「東洋学芸雑誌」では、箕作元八が「奇怪不思議ノ研究」⁽²⁸⁾と題した文章を発表した。

「東洋学芸雑誌」は、イギリスの通俗科学雑誌「Nature」を範として、東京帝国大学の教授陣を中心に明治一四年一〇月に創刊された理学啓蒙雑誌であり、明治初期の日本に西洋の科学的思想を紹介することに一役買った。

前掲した箕作元八の文章では、明治一六年にイギリスに「心理研究会」⁽²⁹⁾が創立されたことを紹介し、アメリカの「サイエンス」誌とイギリスの「ノーリッジ」誌に掲載される「察心」・「奪感」・「妖怪」・「鬼屋」などの実験に関する記事を訳して掲載する。各訳語に付けられたルビからわかるように、「察心」は「読心術」のことであり、これは「テレパシー」と同じものである。そして「奪感」は催眠術を指している。また、文末に「我國ニハ此等奇怪ノ事極メテ多ケレドモ或ハ之ヲ妄信シテ更ニ疑ヲ容レス或ハ不語

怪力乱神、敬鬼神而遠之ナド、理屈ヲ付ケテ不問ニ舍キ之ヲ研究スルノ勞ヲ取ル者ナク徒ニ面白キ事実ヲ曖昧ニ附シ置クハ遺憾ト云フヘキナリ」と、当時の日本社会における、超常現象の存在を探索せずにひたすらその存在を否定する態度に「遺憾」の念を示している。また、井上円了が「奇怪研究」に「企ある由を聞きたれども（中略）如何なる成績を得られしや知るべからず」と述べたことが箕作の文章に記載され、円了の研究は「本邦奇怪研究ノ第一着トモ云フ可キ」だと評されている。「哲学雑誌」で活躍している井上円了は、明治一九（一八八六）年一月二四日に東京帝国大学内で「不思議研究会」を成立し、同会の会員らは、後に「哲学会」が創立された時にも入会した⁽³⁰⁾。氏は超常現象を「妖怪」と通称し、「妖怪」の哲学・心理学による解釈を試みた。「哲学雑誌」の初期メンバーは、心霊研究が盛んになっていなかった明治一八年頃にすでに活動していることもこの記事から窺える。箕作元八の文章は、心霊研究を評価する先駆的な文章だと考えられるが、イギリスですでに心霊研究が流行っていた明治二〇年前後に刊行された本誌において、心霊研究関連の文章は、上記の箕作元八の記事及び、第五六号⁽³¹⁾での「催眠術」に関する記事のみである。「東洋学芸雑誌」では心霊研究に関して多く論じられていなかった。なお、「催眠術」に言及する文章では、「其頭象稍想像外に出づる以て随分教育のある人にては何理外（Supernatural）の事の如く思ひ半信

半疑の様子なり」と、催眠術に対する知識層の一般的な態度がわかる。

次に、「哲学雑誌」でも活躍した心理学者元良勇次郎⁽³²⁾・松本亦太郎⁽³³⁾、または松本文三郎⁽³⁴⁾・井上円了⁽³⁵⁾らの哲学者による寄稿が多く見られる。「六合雑誌」における心霊研究の受け入れ状況に注目したい。明治一三（一八八〇）年創刊された「六合雑誌」は、小崎弘道らがキリスト教の教理を中心に、西洋の政治・宗教・思想・文学・芸術などを紹介する綜合雑誌である。同時代に発刊された「七一雑報」は、「文学芸術凡そ世道に益あるものを載せ、就中教門の如きは最も切実に弁論して基督の真理を照かにせんとするものにて」とこの新しく創刊された雑誌を紹介する⁽³⁶⁾。キリスト教理を中心とする「六合雑誌」では、〈霊〉・〈奇跡〉の存在は否定されない。（この態度は、明治日本に大きく影響を与えたスペンサーの「進化説」を同誌にて批判する言論が多く見られる点にも窺える⁽³⁷⁾。）〈霊〉の存在を肯定する「六合雑誌」だが、心霊学に関する記事は少ない。明治二〇年前後では、小崎弘道の「メスメリズム」及び「スピリチュアリズム」（第六三・六四号にて連載、明治一九年三・四月）や神智協会の創立者オルコット氏に関する記事⁽³⁸⁾が掲載される程度である⁽³⁹⁾。また、「靈魂」と「肉体」との関係に言及する記事は、W・デニングの講演の和訳「靈魂ト肉体ノ緻密ナル關係ヲ論ス」⁽⁴⁰⁾があるが、「此論說ノ論題即チ現世ニ於

テ心神ノ相關係スル如何ト云フニ在ルナリ而シテ來世ニ於テ人魂ノ体ヲ有セスシテ存シ得ルカ將タ得サルカト云フハ之レ學術上ノ問題ニアラスシテ宗教上ノ問題ナレ」という一文からわかるように、キリスト教理に基づいた解釈であり、心霊研究とは異なっている⁽⁴¹⁾。

明治三〇年代に入ると、心霊学関連の著作が多く出版されており、その中では催眠術の流行についての出版が著しい（【付録1】を参照）。一柳廣孝氏は、竹内楠三の『心理作用読心術自在』がベストセラーとなったことが、明治三〇年代の心霊学（特に催眠術）ブームの火付け役を果たしたと指摘する⁽⁴²⁾。桑原俊郎の『精神靈動第一編催眠術』も、発行してからまもなく訂正七版が出版され、当時の心霊学ブームの盛況さ⁽⁴³⁾が窺える。明治三〇年代には、心霊研究が社会問題になるほどブームとなった。明治期における心霊研究の流行が明治三〇年代に入ってからであることは、「六合雑誌」において「催眠術」などの、心霊学関連の記事が頻繁に紹介されるようになったのが、明治三六年以降であることから窺える。第二二二号では「催眠術」（明治三六年八月一日）が掲載され、第三〇〇号では、「催眠術の歴史と効用」（明治三八年一月一日）が掲載される。明治四〇年五月刊行の第三一七号では、「心霊交感」と題する文章が見られる。明治四四年二月（第三六二号）では、当時社会問題となった「千里眼問題」を論じる「千里眼問題」と題する文章がある。

そして第三七七号（明治四五年六月一日）にて、「靈の実験」が紹介される。「六合雜誌」での心霊學関連の記事は、西洋の新しい學說として紹介されるのではなく、明治三〇年代の催眠術・四〇年代の千里眼ブームと並行し、当時の日本社會の流行を反映するものとして紹介される。

以上のように、東京帝國大學哲學會発行の「哲學雜誌」には明治二〇年代の前期にすでに心霊研究の文章が掲載されていたが、その他の、日本國內の學術界が発信する心霊研究は主に明治三〇年に入ってからとなる⁽⁴⁾。漱石は超常現象の存在を（迷信）とし、心霊研究を卑しめた傾向がある明治二〇年代初期に大學時代を過ごした。「哲學雜誌」は、心理學の観点から超常現象を分析する心霊研究を日本國內に紹介し、本誌に掲載された心霊主義関連の記事では、心霊研究の核となる（靈）の存在の概念についても触れている。「哲學雜誌」の編集作業を通して、心理學の一環として紹介される心霊學と接触したことは、漱石の心霊學の教養に重要な役割を果たし、心霊研究で重要な（靈）（ジェームズの言う「大きな意識」）の存在という問題に接触する最初のきっかけともなったであろう。では、心理學の観点で心霊學を解釈する「雜錄」欄は、漱石が關心を持っていた問題と如何なる繋がりがあるのか、次節にて具体的に検討したい。

四、漱石作品における心霊學の受容

「哲學雜誌」の時期から心霊主義に関する知識に触れた漱石は、「哲學雜誌」の編纂委員を辞任した後も、心霊主義と関連する著書を購入している。漱石の蔵書目録には、明治三〇年以降に出版された心霊主義に関する書籍が散見されている。たとえば、『思ひ出す事など』での（死後の生）に関する漱石のことばからも、漱石が心霊學と関連する著作を多数読んでいたことがわかる。

　　自白すれば、八九年前アンドリユ・ラングの書いた「夢と幽靈」といふ書物を床の中に読んだ時は、鼻の先の灯火を一時に寒く眺めた。一年程前にも「靈妙なる心力」と云ふ標題に引かされてフランマリオンという人の書籍を、わざ／＼外國から取り寄せた事があつた。先頃はまたオリヴァー・ロツヂの「死後の生」を読んだ。死後の生！名からして既に妙である。我々の個性が我々の死んだ後迄も残る、活動する、機會があれば、地上の人と言葉を換す。スピリチズムの研究を以て有名であつたマイエルは慥かに斯う信じて居たらしい。其マイエルに自己の著述を捧げたロツヂも同じ考へのように思はれる。つい此間出たボドモアの遺著も恐らくは同系統のものだらう。（『思ひ出す事など』一七）

この引用に言及された、『靈妙なる心力』という本は、カ

ミュー・フラマリオンが明治三九（一九〇六）年に発表した作品である⁽⁴⁵⁾。この作品は明治四〇（一九〇七）年に英訳され、現在、漱石の蔵書目録に収録されているのもこの明治四〇年版である。漱石の蔵書目録には、フランク・ポドモア（Frank Podmore）の“Apparitions and Thought-Transference: an Examination of the Evidence for Telepathy”⁽⁴⁶⁾もある。ただし、「つい此間出たポドモアの遺著も恐らくは同系統のものだらう」という一文から、漱石は『思ひ出す事など』が書かれた時点で、まだその著作を読んでいないと考えられる。また、漱石のこれらの作品を知った経緯は他の機会に考察したい。また、漱石がフラマリオンの“Mysterious Psychic Forces”を取り寄せたきっかけは「標題に引かれ」たためと述べており、彼が心霊学関連の著作に興味を持っていたことが窺える。引用部に従い、『思ひ出す事など』が発表される明治四三（一九一〇）年から逆算すると、漱石がラングの『夢と幽霊』を読んだ時期は、明治三四（一九〇一）年あたりになる。実際漱石文庫に所蔵されるラングの『夢と幽霊』の見返しに、‘Begun 9th March 1901/ Finished 10th’ というメモがあり、漱石は留英中に『夢と幽霊』を読んでいたと考えられる。漱石は心霊学関連の書籍を読み、明治三十七年に降に発表された自身の小説にも「催眠術」・「テレパシー」などをしつば登場人物の話題にあげていた。以上のように、彼が心霊学に関心を持っていることは明らかである。しかし、その

理由は同時代にあった心霊学ブームの理由と同じであろうか。『思ひ出す事など』の中で、漱石が「死後の生」を考える際、「吾々の意識には数居の様な境界線があつて、其線の下は暗く、其線の上は明らかであるとは現代の心理学者が一般に認識する議論の様に見える」と述べる箇所は、ジェームズの『多元的宇宙』の論理から触発されたと思われる。『思ひ出す事など』によると、漱石は明治四三年の「修善寺の大患」の後の療養中にジェームズの『多元的宇宙』を読んでいた。「教授が何事によらず具体的事実を土台として、類推で哲学の領分に切り込んで行く所」を、「文学者たる自分の立場から見ても、特に興味を持っていたとしている。

超常現象について、ジェームズは「超常現象を信じたい人には、信じるに足る十分な証拠が出る一方、信じたくない人には否定するに十分な曖昧さが残る」と言っている⁽⁴⁷⁾。超常現象を肉体的な人間の存在と異なる「意識」として考えるため、ジェームズは超常現象の有無を断言しない。漱石も『思ひ出す事など』の同章で、「相当の学者が綿密な手続を経て発表した数字上の結果すら、吾々はたゞ数理的の頭脳にのみ最もと首肯だけである。数量のあらましさえ応用の利かぬ心の現象に関しては云ふ迄もない」と思い、「自分に経験の出来ない限り、如何な綿密な学説でも吾を支配する能力は持ち得まい」と、ジェームズと同じく超常現象の存在を断定しない。また、ジェームズが超常現象の存在を否定しない理

由は、心霊研究者F・W・Hマイヤーズの学説からの影響が大きい⁽⁴⁸⁾。マイヤーズは肉体のほかに〈意識〉の存在を提唱し、「われわれはそれぞれみな、実際には、自分で知っているよりも遙かに広大な永続的な精神的實在物である」と述べており、ジェームズはそれを「潜在意識的自己」と称する。ジェームズが超常現象の存在を否定せず、心霊研究の価値を認める理由も、「潜在意識的自己」への探求と関わっている。この概念は『思ひ出す事など』の、「どうして幽霊となれやう。どうして自分より大きな意識と冥合出来やう」という漱石の言葉からも窺える。漱石が『思ひ出す事など』で、近代科学で解釈できない超常現象への探求を否定しないことから彼の心霊学及び心理学に対する関心の焦点はジェームズらと同じく、自己の肉体のほかにある、〈意識〉への探求にあると言えるのではないだろうか。漱石の心霊現象と心理学の關係に關する思考回路は、「哲学雑誌」の時期に接触した、心霊学を心理学に内包する心霊学関連の文章まで溯れるのではないだろうか。

一柳廣孝氏は、漱石の初期作品に見られる心霊学の話題の多用は、明治三〇年代の心霊学ブームと関連していると指摘する⁽⁴⁹⁾。作品の発表された時代背景によると、一柳氏の指摘するように、心霊学ブームは確かにその一因である可能性は否めない。ただし、「哲学雑誌」の時期に漱石はすでに心霊学の知識と多く接触しており、「哲学雑誌」での心霊学関

連の記事が多数掲載されることに、漱石をはじめとする編集委員らの心霊研究に対する関心も窺える。「哲学雑誌」の編集作業を通して、心霊学に関する知識と接触した漱石は、明治二〇年代の後半に参禅に赴いた。明治二七年八月のはじめの参禅の後、漱石は「生來の凡骨到底見性の器に非ず」と自身が悟れないものだと考えていた。そして同じく明治二七年一月から明治二八年の一月頃に、漱石は再び参禅に赴き、「父母未生以前の本来の面目」という公案をもらったものの、「本来の面目を撥出し来らず」⁽⁵⁰⁾と、悟れないまま参禅を終えた。自己の本来の心性を徹見する禅宗の悟りに漱石が関心を示したことから、彼の参禅も、肉体のほかにある〈大きな意識〉に対する関心と繋がっていると考えられる。そして以上のように、これまで漱石が多方にわたって探求してきたこの問題は、社会での流行をきっかけにアウトプットされ、自身の最初の小説に取り込まれた⁽⁵¹⁾。

漱石の小説に見られる、超常現象と人の〈意識〉との關係は、後期の作品でも活用されている。大正(一九一二年)元年の『行人』では、「遺伝とか進化とかに就いての学説」に「得意」な主人公一郎がいる。「人間の不安は科学の発展から来る」と思う一郎は、「人間全体が幾世紀かの後に到着すべき運命を、僕は僕一人で僕一代のうちに経過しなければならぬから恐ろしい」と、不安な思いを抱えている。そして「鋭敏な神経」を持つ自分が感じる「恐ろし」さはほかの人

と異なっていると思っている。一郎は「現在自分の眼前に居て、最も親しかるべき客の人、其人の心を研究しなければ、居ても立つても居られないといふやうな必要」を意識し、ほかの人と自身との懸隔を意識するようになった。そして、「向ふでわざと考へさせるやうに仕向けて来るんだ。己の考へ慣れた頭を逆に利用して。何うしても馬鹿にさせて呉れないんだ」と、身についた知識と自身の頭脳が他者の心を理解することに支障を与えていると一郎は思う。常に他者の心を理解できないことに悩む一郎は、「読心術」とも称されるテレパシーに関心を持つようになった。「他の心は外から研究は出来る。けれども其心に為つて見る事は出来ない。其位の事なら己だつて心得てゐる積だ」と思う一郎だからこそ、テレパシーに興味を持ち、他者の心を心霊学により理解したいのではないか。『行人』でのテレパシーは、近代科学でも解明できない人の内面を、超常現象により、説明する手がかりの一つとして一郎に使われている。また、テレパシーにより精神的な苦悩から解放できなかった『行人』の一郎は、作品の終章に、「善も投げ悪も投げ、父母の生れない先の姿も投げ、一切を放下し尽して仕舞つた」香厳という禅宗の坊主になぞらえ、「どうかして香厳になりたい」と思っていた。一郎が救いを求めるプロセスは、漱石が明治二〇年代の後半に参禅に赴いたことと類似している。彼らは《大きな意識》への探求により、自身の精神的な悩みを解消しようとした。

漱石の初期作品における、幽霊などの超常現象は、『吾輩は猫である』のように、作中の話題提供として、もしくは、『琴のそら音』に見られるように、主人公の不安の表れとして使われている。一方、『行人』の一郎は、科学的な《読心術》で、知識人である自分が理解できない他者の内心を窺おうとする。『哲学雑誌』時代から、漱石には心理学的な解釈をした心霊学に対する関心が窺える。また、人間存在の本質にある《意識》の存在に関連する超常現象は、漱石作品の中でも使い方に変化が見られ、活用されるようになっていく。

おわりに

『哲学雑誌』は、日本の心霊学の受け入れに先導的な立場であつた。漱石は『哲学雑誌』を通して、超常現象と心理作用との関連性を認識するようになったと考えられる。明治三七・八年の頃に漱石が創作した、『吾輩は猫である』・『倫敦塔』・『幻影の盾』・『琴のそら音』・『一夜』・『薔露行』・『趣味の遺伝』など一連の作品には、超常現象に纏わる話題が見られる。これらの作品に超常現象が取り込まれたことには、『哲学雑誌』の編纂委員の時期に、彼が接触した文章の影響が否めないと考えられる。『哲学雑誌』の時期から見られる漱石の心霊研究に対する関心は、自身が明治二〇年代後半に参禅したことや、イギリス留学中に心霊主義の著書を多数購読することとも繋がっている。心理学の一環として心霊研究

を紹介する「哲学雑誌」の編集作業を通して、漱石の心霊学に対する関心は彼の心理学に対する関心と繋がった。そしてこの流れの根底に、漱石の人間存在の本質への探究という問題意識がある。心霊研究は、明治三〇・四〇年代の人々にとって、一つのブームにすぎなかった。しかし、漱石にとつて、心霊学は「科学」で説明できない「大きな意識」の存在を説明し、科学と自然との懸隔を埋めるような存在である。さらに、漱石は超常現象を小説の登場人物の心境描写に利用する。漱石の小説に見られる超常現象のとらえ方の源流は、心霊学を心理学の一つとして紹介する「哲学雑誌」にまで遡ることができよう。

【附録1】明治三〇年代の日本国内の心霊学関連の書籍の出版リスト⁽⁵²⁾

明治三五年 8月 『仏教の価値』

明治三六年 3月 『催眠術自在（学理応用）』（竹内楠三）

5月 『近世天眼通実験研究』

『天人論』（黒岩涙香）

9月 『心理作用読心術自在』（竹内楠三）

『最新一元哲学』（高橋五郎）

『催眠術及感応法』（山崎増造）

11月 『催眠術及覚醒法要訣』（菊池芙蓉）

『催眠術実験の成績』（佐々木久平）

明治三七年

12月 『神秘哲学』（高橋五郎）

『催眠術二於ケル精神の現象』（佐々木久平）

1月 『催眠術独習』（近藤嘉三）

2月 『催眠術に於ける暗示法』（中堂謙吉）

『通俗講義 靈魂不滅論』（井上円了）

『心学叢書』（赤堀又次郎）

『催眠術 簡易速成』（山本止）

3月 『催眠術及ズツゲスチオン論集上巻』（国家医学会）

5月 『催眠術 実践新心理学』（石龍子）

7月 『催眠術治療自在』（竹内楠三）

8月 『催眠術矯癖自在』（竹内楠三）

10月 『催眠術善処（施術自在）』（熊代彦太郎）

11月 『動物催眠術（実験自在）』（竹内楠三解説）

12月 『宇宙観』（高橋五郎）

『精神靈動第一編催眠術』（桑原俊郎）

『神秘術 前・後編』（山崎増造）

『催眠術実地伝習（暗示法詳説）』（熊代彦太郎）

2月 『自身感応術』（富永勇）

明治三八年

5月『催眠術概論（学理応用）』（加藤十次郎）

6月『催眠術通信教授全書』（天野勇治郎）

『催眠心理学概論』（福来友吉）

7月『催眠術独稽古』（古屋鉄石）

9月『催眠学独修』（幕内椿三郎）

『心理学教科書』⁽⁵³⁾（福来友吉）

明治三十九年

5月『神秘的反獣主義』（岩野泡鳴）

【附録2】

（「カッコ」内の数字は号数。また、心靈学関連の文章はゴシックで標記する。）

第四冊「雑録」（明治二三（一八九〇）年三月から明治二

四（一八九一年二月）

（37）「印度の宗教（承前）」・「我邦現時の小説の欠点」・「人間の自然進化論（承前）」・「二重の意識」

（38）「ハルトマン氏の厭世主義」・「西藏の仏教」・「注

意の心理」

（39）「偏見の心理」・「鬼神論に就いて」

（40）「鬱憂病の生理的及進化的觀察」・「鬼神論に就いて」・「印度の宗教」

（41）「鬱憂病の生理的及進化的觀察」・「自殺は罪過

か」・「タルハノフ（シント、ピータースボルグ）に於ての試験」・「ルヌヴィエー氏の哲学的所見」

（42）「千八百年代仏国の哲学」・「脳に於ける聴覚の位地」

（43）「戯曲「ハムレット」の心理」・「埃及の古代教育」・「催眠術の危険」・「身体と精神との発達の比較」・「運動的幻想」・「女子の論理力」・「音響を聴きて幻像を視る」・「神秘哲学」・「ワイスマン氏の遺伝説」

（44）「帰納的思想の進化」・「幻想の一例」・「フイエー

氏の新著」

（45）「帰納的思想の進化」・「注意の変態」・「犯罪的心理学」・「脳髓中言語の中樞」

（46）「道德教育の二法」・「魔睡と犯罪」・「メスメリズム」・「催眠論」・「精神過役」

（47）「学校衛生論」・「犯罪的意志の伝染」・「子供の語る虚言」

（48）「東洋純正哲学を読む」

第五冊「雑録」（明治二四（一八九一）年三月から明治二

五（一八九二年二月）

（49）「六合釈につき」・「子供の語る虚言（承前）」・「音楽の起源」

（50）「音楽の起源」・「論理学の一問題」・「清朝儒者年

表一

(51) 「ヘルムホルツ」氏の空間知覚論」・「功利主義の難問」・「霊の遺産」

(52) 「意識の性質」

(56) 「心理学問題」・「ロック」伝」・「猿猴属の言語」

(57) 「意識の性質」・「心理学問題」

(60) 「人種学と審美学と」

第六冊「雑録」(明治二五(一八九二)年三月から同年五月)

(61) 「人種学と審美学(承前)」・「ロック」伝(完了)・「人のみ推理し得るか」・「願望及び厭惡の性質」

(62) 「願望及び厭惡の性質」・「スペンサー」氏倫理学原理第四篇批評」

(63) 「催眠術」(54)

注

(1) 川村邦光「漱石と神経衰弱」(漱石研究 第一五号、翰林書房 平成一四(二〇〇二)年)。

(2) ジェームズは米国の心靈現象研究協会(MSPR)の創立者の一人である。

(3) ここでいう「心靈字」は、一柳廣孝説を援用し、スピリチュアリズ

ム、サイキカル・リサーチ、スピリティズムの解説・研究・紹介に関連する知識をさす。一柳廣孝氏の定義は、「明治期刊行の心靈學関連書籍とその周辺」(名古屋近代文学研究 第十三号(平成八(一九九六)年)に詳しい。

(4) 藤代慎輔が述べた、「君が三年生の時、『哲学会雑誌』が『哲学雑誌』と改題して少し世間向の材料を加へようと云ふ方針になった。君も編輯員の一人として雑誌の原稿を担当して居たが、或時英國の催眠術師の記事を寄せた時、中に「豊類細腰の人も亦行く」と云ふ文句があつて同人間の注目を惹いた。それから君は英文雑誌の受売を屑とせずして『英國詩人の天地山川に対する観念』と云ふ題で自家の研究を発表した(中略)君が文藻に豊かなことは、此頃既に同学間の推賞する所となつた」という文章から、「催眠術」は漱石が訳したものとされ、『漱石全集』(「夏目君の片鱗」、『漱石全集』別巻)に収められた。

(5) 大久保純一郎「第二章 文学を志す頃」(『漱石とその思想』荒竹出版、昭和四九(一九七四)年十二月)。

(6) 上田正行「『哲学雑誌』と漱石」(金沢大学文学部論集 文学科 第八号、昭和六三(一九八八)年二月)。

(7) 本論では便宜上、雑誌全体をさす際、「哲学雑誌」で表記する。

(8) 「哲学会雑誌」は「冊」で号数を数えるのに対し、「哲学雑誌」では「巻」に改称されている。

- (9) 「哲学会」の沿革に関して、桂寿一の「哲学会」と「哲学雑誌」(『日本学士院紀要』第四〇巻第三号、昭和六〇(一九八五)年一月)が詳しい。
- (10) 「本誌改良ノ趣意」(第七冊第六十四号、明治二十五年六月)。
- (11) 第四冊第三十七号(明治三三(一八九〇)年三月)。
- (12) 一方、文科大学の学生の入会に関して、第五冊第五十四号の「記事欄」では、哲学科一年生の松本亦太郎と大学院生の狩野亨吉の入会申し込みを「本会規則により投票を行はずして入会を許可せり」と、無条件で入会できることがわかる。
- (13) 漱石の入会時期に関して、明治二五(一八九二)年の七月と推定する説が通説であり、小宮豊隆の『夏目漱石』の影響で、荒正人の『漱石研究年表』でも小宮説を援用している。しかし、この引用からわかるように、正しい入会時期は明治二十四年の七月頃であると推測できる(この説は、上田正行が「哲学雑誌」と漱石」の中でも示している)。(金沢大学文学部論集 文学科篇)第八号、昭和六三(一九八八)年二月)。
- (14) 「十月二十五日文科大学に於て例会を開き、小林光茂氏「哲学問題の焼点」に付て講演ありたり。又同会編集委員夏目金之助は辞任せられたるにより、松本亦太郎氏代て就任せられたり」。(『哲学雑誌』第八巻第八十一号「各月掲載」、明治二十六年十一月)。
- (15) 明治三年から二十四年の『帝国大学一覽』(学生及び生徒氏名)を参照した結果、英文学科の学生はわずか二名であり、その二名とは明治四年に三年生である立花政樹と学年が二年下の夏目金之助である。「哲学雑誌」が改編した明治三五年六月に、英文学科の学生は金之助一人のみの可能性が高い。
- (16) 同前掲上田正行氏論文。
- (17) 「進化説沿革一般」(論説)第二冊第二〇号、「社会学史略」(論説)第二冊第一九・二二号、第三冊第七・三三三号、第四冊第四三三号、「進化主義の一大問題」(論説)第四冊第三九・四〇・四三・四六号、第五冊第五一号、「鬱憂病の生理的及進化的観察」(雑録)第四冊第四〇・四一号)。
- (18) 松本亦太郎『心理学史』(改造社、昭和二二(一九三七)年五月)。
- (19) 『東京大学年報』第三巻(東京大学史史料会編、平成五(一九九三)年)。
- (20) 外山正一の後継に哲学科の教員として文科大学に入った。
- (21) 故元良博士追悼學術講演會編『元良博士と現代の心理学』(弘道館、大正二(一九一三)年)。
- (22) 「哲学大会則」「追加」第二条(『哲学会雑誌』第一冊第一号、明治二〇年二月)。
- (23) 同前掲『元良博士と現代の心理学』。
- (24) 平井金三が『心霊の現象』(警醒社、明治四二(一九〇九)年四

月)の中で、明治三年の時に、心靈研究に関心を持つ野口復堂氏がインドの靈智学会よりオルコット氏及びダムバラ氏を講演に招いた時の回想である。

(25) 当時の心靈研究は、「こっくりさん」の日本で流行し始める起源を、伊豆下田沖で海難にあつたアメリカ船員が、当地の人に伝えたからであるという事実の考証までに止まっている。

(26) 雑誌の考察は、『明治雑誌目次総覧』(ゆまに書房、昭和六〇(一九八五)年)を利用した。

(27) 『明治期刊行圖書目録』(国会国立図書館、昭和四六(一九七二)年三月)参照。

(28) 『東洋学芸雑誌』第四二号。

(29) 心靈研究に興味を持つ、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジの学寮長二人が創立したSPR (The Society for Psychical Research) のことである。

(30) 井上四了『妖怪学講義』『井上四了選集』第一六卷、東洋大学、平成一一(一九九九)年。

(31) 『東洋学芸雑誌』第五六号、明治一九(一八八六)年五月二五日。

(32) 「知識交換論」(第三二・三三号) (この文章に論じられた「交換」は、「言語」・「文字」による、人と人の間に行う知識の交換であり、テレパシーなどのような交感現象ではない)。「米国心理学の近況」(第九二号)・「日本歴史を学ぶの要を論ず」(第九六号)・「愛情論」(第一〇〇

号)・「小説を読むの利害」(第二〇四号)・「アトラクタ島と日本の関係」(第二〇七・一〇八号)・「倫理学ハ哲学力將た科学力」(第二二四号)・「ゼームス氏心理学を読む」(第二二二号)・「民俗論」(第二五三号)・「恥辱の感情に就て」(第一六五号)・「人格の種類」(第二五号)・「精神修養上宗教と科学の關係」(第三〇二号)・「一読一抄」宗教と大望心」(第三三二号)・「一読一抄」仏教、基督教、儒教の特徴」(第三四四号)・「一読一抄」理論家と実行家」(第三四八号)。

(33) 「印度哲学僧法論」(第一五五・一五六号)・「言語相貌」(第二六一号)・「シュッペンハーワー氏宇宙問題解説論」(第一六三・一六四号)・「社会に対する富豪家」(第一七一号)・「心意の物的基礎」(第一七七号)・「タゴール氏の齎せる印度画について」(第四二六号)。

(34) 「文科大学教授元良博士の倫理学を読む」(第一五五号)・「現時我邦に於ける基督教徒の態度を論ず」(第二〇八号)・「政治法律に於ける哲学の影響」(第二二六号)・「方法の問題なり」(第三七四号)。

(35) 「我人生観」(第二九五号)・「精神の活用」(第二九九号)・「日本の国教」(第三三三号)。

(36) 「七二維報」五卷三八号、明治一三(一八八〇)年九月一七日。

(37) 『東洋学芸雑誌』・「六合雑誌」・「中央學術雑誌」におけるスペンサーの学説の解釈の違いに関して、榎林渥二氏の考察が詳しい。(H・スペンサー)哲学受容の様相——『東洋学芸雑誌』・「六合雑誌」『中央學術雑誌』を中心に——(『国文学攷』第一〇八・一〇九号、昭和六一(二

九八六) 年三月)。

(38) 第九八・九九 (同明治二年) 号。

(39) そのほか、小崎弘道「靈智協会の起源及び来歴」(『六合雜誌』第九号、明治三二(一八八九)年三月二六日) もある。

(40) 第三五・二七・二八号にて連載(明治一五(一八八二)年七・九・一〇月)。

(41) 第九一号では、伊勢時雄の「人の靈性を論ず」がある。

(42) 一柳廣孝「深層の近代——明治期の心靈字受容をめぐって」(『人文科学論集』第五号、平成五(一九九三)年)。

(43) また、キリスト教徒で英文学者の平井金三(ちが)が、明治四一(一九〇八)年に「心象会」を成立し、機関誌「道」の中で、心靈研究に関する記事が多く掲載される。

(44) 明治三六(一九〇三)年に発刊の、「丁西倫理会倫理講演集」でも、明治四一年二月刊行の第六五号以降に、心靈研究に関する記事が多く見られる。

(45) フランス語の原題は「Les Forces Naturelles Inconnues」であり、英語版では「Mysterious Psychic Forces」に訳された。

(46) 「The Contemporary Science Series」(W. Scott, 1894)。

(47) In order to disprove the law that all crows are black it is enough to find one white crow. This is highly applicable to the paranormal." (Gardner Murphy M.D. and Robert

O. Ballou "William James on Psychical Research" (The Viking Press, Inc., 1960)

(48) たとえば、ジエームズが自身の著作『宗教経験の諸相』の中で、意識の潜在的な領域を論じる際、マイヤーズの潜在意識に関する研究を「潜在意識圏の地誌字に方法的な第一歩をふみ出した」と評価し、その潜在意識の存在にジエームズも認めている。

(49) 一柳廣孝「科字字の行方——漱石と心靈字をめぐって——」(『文学』第四卷二号、平成五(一九九三)年)。

(50) 斎藤阿具宛て書簡、明治一八年一月九日。

(51) 『吾輩は猫である』が執筆された明治三七年頃、催眠術は取締法が制定されるほど社会的にブームであった。そして漱石がこの小説の執筆中に書いたと思われる断片でも、「催眠術」と単語でメモした箇所があり、「催眠術」の話題を意図的に作中に取り込むとする可能性がある。

(52) 明治三〇年から三四年の間に刊行された心靈学関連の書籍は、『心理学』と題した著書がほとんどであるため、それらの引用を省略する。

(53) 明治三〇年代後半から四十年前半にかけて、福来友吉氏が「心理学」関連の著書を少なくとも四冊も出版した。これらの書籍ではすべて超常現象を見たことを心理作用の錯覚によるものと論じている。

(54) 『漱石全集』に収録される、Ernest Hart, M.D. 「催眠術」の和訳。

※ 本文の引用は以下の通り…夏目漱石の作品の引用は『漱石全集』（平成五（一九九三）～平成一一（一九九九）年、岩波書店）に拠った。旧字は適宜に新字に改訂し、傍線はすべて執筆

者によるものである。

（そうせんけい／本学大学院博士後期課程）